

# 目をこらして (2)



『もりのへなそうる』という話が大好きな子どもたちと、『へなそうるの赤ちゃんが生まれたよ』という続きの話をつくり、劇にして遊んだことがある。

へなそうるは、へなそうる星に住んでいる。それは、地球から数えて三番目の赤い星ということになった。

「この星がへなそうる星なんだよね」と大きな紙に地図をかき、それを黒板に貼った。ある朝のこと。

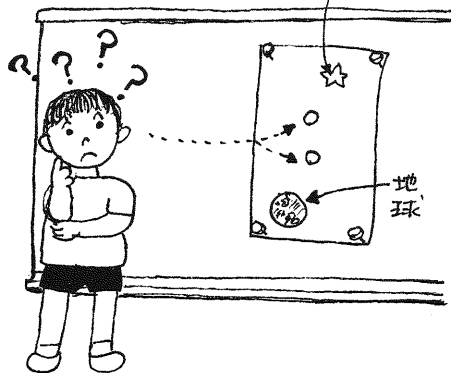
「おはよう」とやってきたS君が、その地図の前に立ち、首をひねっている。「S君どうしたの？」と聞いてみると、S君が考え深そうに言った。

「この緑の星は、何って言う星なんだろうね」

\*

へなそうる星は、地球から少し離れていた方が感じがでるよね、という位の軽い気持ちで誕生した一番目と二番目の星。だから私はその星が何星だろうなんて、考えてみたこともなかった。ところが、S君は、全てに意味を見いだしていく。「この一番目

赤い星(へなそうる星)



と二番目の星は何星だろうね？」と考える。

子どもは、自分の身の回りにあるもの全てに、思いを寄せていく。意味を感じていく。S君のつぶやきが、今も私の中に、響いている。

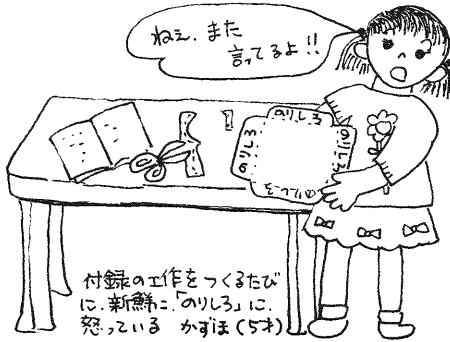


# 耳をすまして

娘は、小学校入学を目前にした頃から、急に文字に興味をもち始めた。

「これは？」「これは？」と、身のまわりにある文字を片っ端から読んでいく。

そんなある日のこと。



雑誌の付録の工作をしていて、一人でぶつぶつ文句を言っている。

どうしたのかと思って聞いてみると、

「こんな言葉遣い、いけないだよね」と言う。

「え？」と思って娘の指さすところを見てみると、

そこには「のりしろ」の文字が……。

\*

身のまわりにある、大人が当たり前のように見ているものが、そうではなくうつっている子どもたちの目。

「何だろう」「何かな」と考える子どもたちの心。

子どもたちのつぶやきに耳をすまします。

子どもたちの見方で見直すと、何だか世界が新鮮に見えてくる。

絵と文 宮里 暁美

(目黒区立ふどう幼稚園)